

ぬりぐすりの使い方 2025. 9

◎塗り薬には軟膏、クリーム、ローションなどがありますが、それぞれ主薬を溶解して皮膚に浸透させる【基剤】と、薬効がある【主剤】から構成されています。基剤は適症状や部位によって使い分けます。



◎軟膏（油脂性軟膏）基剤は水分を含まず、べたつき感はあるものの保護膜を形成し、皮ふを保護する働きがあり、皮ふへの刺激性が少なく、すべての皮ふ疾患に適応性を有しています。

◎クリーム基剤は水、油と両者を混じりやすくする界面活性剤から成り立っており、伸びが良く、べたつきが少なく、さっぱりした使用感があります。しかし水で洗い流されたり、汗で流れたり皮ふへの刺激性が問題になることもあります。

◎ローションの基剤はクリームと同様に、一般的には水と油と界面活性剤からなります。より水分を多く含んでおりさらっとして塗りにやすく水で洗い流せます。頭皮など有毛部に塗しやすい、発汗部に塗しやすい、油分が少ないので皮ふが乾燥しやすい、皮ふへの刺激性が強いなどの特徴があります。

◎主剤はステロイド、消炎鎮痛剤、抗生物質、抗ヒスタミン剤（かゆみ止め）、清涼剤（メントール）などがあり、単剤または合材として混合されています。医療用外用薬は単独の成分であることが多く、薬局で販売されている外用薬は、主剤の含有量が低く抑えられていたり、**複数の成分**が配合されているものが多くなっています。

◎現在、ステロイド含有軟膏やクリームの塗る量は1FTU（finger tip unit）という単位を用いて説明されることが多くなりました。これは人差し指の先端から第一関節までチューブ（20gr 以上）から絞り出した量が約0.5gr（5gr の軟膏チューブでは0.25gr x 2）で、両方の手のひらに塗る量に相当するという塗り方です。

◎基剤、主剤ともに副作用があらわれることがあります。特に水分を含むクリームやローションには複数の成分が配合されたり界面活性剤が加えられ、防腐剤の添加が義務付けられているので体に合わないこともあり注意が必要です。外用剤の使用に際しては内容をよく確認し、不明な点は薬剤師や医師に相談してください。